第101号（1981年1月）

国際障害者年
－イエス以来二千年－

今年は国際障害者年である。全世界が、障害者に対し、「完全参加と平等」を宣言し、一人ひとりの障害者に、これを実行しようとする年である。しかし、その理想は高く、存在する現実の不完全と不平等を直視すれば、まことに道なお遠き感さえするのである。

「行って、あなたがたが見聞きしたことを、ヨハネに報告しなさい。盲人は見え、足なえは歩き、らい病はきよまり、耳しいは聞え、死人は生きかえり、貧しい人々は福音を聞かされている。わたしにつまずかない者は、さいわいである。」
(ルカ七22－23)

これは、「きたるべきかたはあなたなのですか」という洗礼者ヨハネの弟子たちに対するイエスの答えである。イエスは、障害者の平等を権利宣言として発表し、運動されたのではなかった。イエスは、仰言ることをすべてその通りに実行された。取税人、売春婦、障害者らに対する鉄の差別、規則の存する社会の中にあって、イエスの仰言ること、為さることは、天衣無縫の自由と活達さをもって、彼らの真の友となり、彼らを包み込み、彼らを完全な人格として遇することであった。イエスの眼には、差別の概念が最初から存在しなかったように思う。形の上の相違、ましてや人間の勝手な思い込みによる階級意識など、イエスの目には、全く意味なき固執としか写らなかったのではあるまいか。

それにしても、人類が国際的な規模で、障害者に完全参加と平等の権利宣言を発するのに何年かかったのであろうか。実にイエス以来二千年である。しかし、もっと大事なことは、二千年たって、人類がイエスに追いついたのではなく、二千年たって、人類が漸くイエスの仰言る神の国の入口に立つことを許されたに過ぎないということである。まことに神の国の消息において、千年は一日の如しである。

新年に当って、私たちは何から始めるべきであるか、この一事をもってしても答えは明白であろう。(半田)

第102号（1981年5月）

レプタ二つ

イエスは目をあげて、金持たちがさいせん箱に献金を投げ入れるのを見られ、また、ある貧しいやもめが、レプタ二つを入れるのを見て言われた。「よく聞きなさい。あの貧しいやもめはだれよりもたくさん入れたのだ。これらの人たちはみな、ありあまる中から献金を投げ入れたが、あの婦人は、その乏しい中から、持っている生活費全部を入れたからである」。
(ルカ二一1－4)

神社仏閣で見かけるきわめてありふれた情景の一つであろう。しかし、そのありふれた情景の中からイエスが取り出されたものは、「捧げ」を通して示される人間の真の姿に対する指摘である。

人間一般を支配しているものは、自我そのものであり、キリスト教ではこれを罪という。「捧げ」を通して、人間は神を礼拝し、私を去って神に依り頼んでいる如くであって、実は神と取引きしようとしている。表面的には極めて敬虔な紳士淑女が、献金の際に頭の中で働かす計算程打算的なものはない。彼らは人の目に多額な献金を捧げることによって、より多くの代償を求めている。ところが、レプタ二つしか持たない貧しいやもめは、彼女にとっては全財産であるレプタ二つが、神を動かすに足る金額だとはもとより思ってもいない。他の人に比べてまことに恥かしい程の額をそっと捧げることによって、彼女は、神のみ前に彼女のすべてを捧げたのである。

「貧しき者は幸である」とのイエスのみ言葉とあわせて、私たちは、このみ言葉の中に、私たちの生きざまを今さらの如く悟らされるのである。(半田)

第103号（1981年9月）

鞭の下よりただわれすがる

うちたまへ御存分にうちてすゑたまへ
鞭の下よりただわれすがる

右は有名な藤井武の歌である。ここに神の御手に激しく打ちすえられながら、ひたぶるに従いまつる絶対的な神信頼の真信仰がある。ヨブがそうであったように、藤井武も完き人であった。しかし、人の目に誤りなく、清潔正義の人であっても、人はどこまでも人である。神の御前に、義しき者は一人だにいない。

ヨブが神に打たれたように、藤井も神に打たれた。藤井が、その全生命を燃焼させて、神の福音を伝うるための壮烈な戦いの途次、神は彼の手から最愛の伴侶を奪った。彼にとって、彼女は生命以上に大切かつ必要な存在であった。むごきことをされる神、それが果して愛なる神なのであろうか。

最近、「十字架の言」誌一九七号「水野源三さんの生涯と信仰」同一九八号「松尾達子（みち）の生涯」を続けて読まして頂いて、衝撃的な感動を味わった。そして、ここに「むごき神」が、まことに超絶的な愛と力をもって、人間を救い給う事が、実証されていることを知った。ここには驚くべき新生命の誕生があった。まさに私達の目の前で、奇蹟が行われているのである。

福音は力である。福音は神の力である。「福音はすべて信ずる者を救いに入らせる神の力である」(ロマ一16)。

(半田)

第104号（1981年11月）

慰めに満ちたる神

　ほむべきかな、わたしたちの主イエス・キリストの父なる神、あわれみ深き父、慰めに満ちたる神。神は、いかなる艱難の中にいる時でもわたしたちを慰めて下さり、また、わたしたち自身も、神に慰めていただくその慰めをもって、あらゆる患難の中にある人々を慰めることができるようにして下さるのである。(IIコリント一3－4)

　キリスト教信仰のもたらすはたらきに種々ある。満足、慰藉、希望、喜悦、勇気、平安等々。その中でもきわ立ってすばらしき賜物は、慰めを与えて下さることである。「いかなる患難の中にいる時でも」とパウロはいう。右に続く八節以下で、「極度に耐えられないほど圧迫されて、生きる望みをさえ失ってしまい、心のうちで死を覚悟し、自分自身を頼みとしないで、死人をよみがえらせて下さる神を頼みとするに至った。」と述べているところからも、「いかなる患難」の内容が、すさまじい現実の体験であったことがわかる。観念的な絶望や内心の自己葛藤などとはわけが違うのである。
　このような客観的な窮地に陥った者が、なぜ絶望せずにすむのか？パウロはいう。「死人をよみがえらせて下さる神を頼みとする」ところにその理由があると。パウロが最も大事なこととして伝えたのは、「キリストが、私達の罪のために死に、三日目に復活したこと」(Iコリ十五3－4)である。キリストの復活即全死人の復活がパウロ信仰の真髄であり、ここから無限の慰めが流れ出てくることを私たちは改めて知るのである。
(半田)

第105号（1982年1月）

ことばは愛である
(ヨハネの第一の手紙二章をよんで)

ことばは愛である
神のことばは
それを守る人のうちに
愛となってはたらく

ことばは愛である
神が愛において
そのことばを語り給うた時
ことばは愛となった

ことばは愛である
もろもろの人を照らす
まことのことばが
愛となって世に来り給うたのだから

ことばは愛である
あのことばを私たちは聞いた
私たちもまた
このことばにあって今日を生きよう
(八一・一一・二二)(石原)

第106号（1982年4月）

主による望み

一主よ、わが心はおごらず、わが目は高ぶらず、
わたしはわが力の及ばない大いなる事と
くすしきわざとに関係いたしません。
二かえって、乳離れしたみどりごが、
その母のふところに安らかにあるように、
わたしはわが魂を静め、かつ安らかにしました。
わが魂は乳離れしたみどりごのように、
安らかです。
三イスラエルよ、今からとこしえに
主によって望みをいだけ。
(詩篇第一三一篇)
　何という謙遜、何という信頼、何という平安、何という希望、であろう。この短かき詩句の中に、福音に生きるもののすべてが語られているのである。
　詩人を取り巻く環境は、決して生易しいものではない。心おごり、傲岸不遜にも、創造者の御座を犯して、この世のすべてを支配しようとするサタンの野望が、あたりに満ち満ちている。この恐るべき強敵に取り囲まれながら、詩人の持つ唯一の武器は、ただひたすらなる主への信頼だけである。
　人の眼より見れば、鬼と赤子の勝負である。結果は、始めから定っている如くである。しかし、見よ！神は必ずみどり子の信頼に応え給う。なぜなら、人には出来ないが、神には出来る。神には、どんなことでもお出来になるからである。(マルコ十27)
(半田)

第107号（1982年10月）
なし

第108号（1982年12月）

水無誌の存続

　生前、水無誌の編集を一手に引受けられた半田兄は、度重なる病気の後でも、「原稿さえ集まれば、編集のことはさ程に負担ではないから」と、むしろ半ばわれわれを励ます様にして、最後までその発行に熱意を注がれたのであった。
　思いもかけない兄の昇天によって、本誌の発行がつまずきはしないだろうかとの懸念もあったが、それも杞憂にすぎず存続の見通しを与えられ、感謝のほかはない。
　「初代教会以来、集会の交わりと手紙交換こそ有力な福音伝播の手段であったことを思い、本誌は読者と一つ希望、一つ信仰、一つ愛で結ばれんことを祈ります」(第一〇二号、後書)との半田兄の言葉は、そのままわれわれの祈りでもある。
　平信徒の集まりによってもたらされるこの様な小さな信仰誌に、もし存在意義があるとすれば、それこそ地方読者との愛の交わりの手段として、神様もこれを嘉し賜うからにほかならない。
　願わくは、二五年間、半田兄の本誌に対する溢れるばかりの愛労を支えられた、「見えざるみ手」が、後なるわれわれをもどうぞ導き賜わらんことを。
(櫻井)

第109号（1983年4月）
なし

第110号（1983年7月）

インマヌエル・アーメン

見よ、おとめがみごもって男の子を産むであろう。
その名はインマヌエル…「神われらと共にいます」という意味である。(マタイ一・23)
◎聖書の使信の中心は何であろうか。それはインマヌエルー「神われらと共にいます」ということである。たとえば旧約聖書においては創世二八・15、出エジプト三・12、詩二三・4、イザヤ七・14等がそのことを教示するであろう。
◎したがって聖書の信仰とは、神がいかなる時、いかなる場においても私たちと共に

いまし給うと信じることである。またキリスト者の信仰生活とは、キリスト・イエスにおいて、神は私たちと共にいますと信じイエスに導かれ、イエスと共に歩む感謝の生活である。

なぜなら新約聖書はイエスこそインマヌエルそのものであり、イエス以外に神はどこにもいまさないことを教示しているからである。

◎インマヌエル－「神われらと共にいます」、この喜びの使信の「われら」とは誰であろうか。それは「罪人」であり、「孤独な存在」であり、「泣く者」、「恐れおののく者」である。そしていかなる人もこの「われら」の中から除外されることはないのである。

また「共にいます」こととは何であろうか。それはイエスが「しばらくの間」、「特定の場所」にのみ私たちとおられるということではない。マタイ二八・20でイエスご自身が約束されたように、それは切れることのない永遠にわたるそしていかなる場所においても、私たちの一切の労苦や悲しみをも背負って下さるというイエスの限りない愛の交わりを意味するものである。したがって私たちが常に唱え、祈求すべきことは「インマヌエル・アーメン」であり、私たちは喜びの時にも、悲しみの時にも絶えずイエスに目を注ぎ、イエスが常に私たちと共にいまし給うことを感謝すべきである。(大森)

第111号（1983年11月）

“パンがなくても人は生きられる”

(マタイ四・4a塚本訳)

通常、「人はパンだけで生きるものではなく」の様に訳されるこの句は、ギリシャ語の原文でも「パンだけでは　生きない　人は」(逐語訳)であり、引用の塚本訳は一見、あるいは誤訳かとさえ思われるが、もちろんその様なことはあり得ない。

この個所の訳し方に触れた塚本先生の説明は概ね次の通りである。(「イエス伝研究」及び「福音書(岩波文庫あとがき)」参照)

従来、この個所(マタイ四章四節)は、霊的なものと解され、人間は肉であると同時に霊的な存在であるから、パンだけでは生きられない。神の言を食べる必要があるとの意味とされた。然し近頃の解釈は霊的でなく、奇跡的な肉の意味と解すべしとされ、先生もそれに従ったということである。もっとも、先生の訳と同じように解するならば、現行訳も間違いではない。要するに、人は自分でパンを心配しなくとも、必要があれば、神がその言葉をもって食物を造って下さるという意味であり、あくまでも食物問題だとされるのである。

そして先生は次の様に結ばれる。“翻訳の形式としてはわたしのは相当「突飛」という非難はあり得る。…古い頭の人たちを驚かしてやろうと思って、わざとこの思い切った訳を選んだのである。躓く人は躓けである”と。

聖書翻訳に八十八年の生涯を捧げられた塚本虎二先生昇天十周年を迎え、表記の一節からも、塚本訳福音書のもつ深い意味あいを今更の様に思わされるのである。(桜井)

第112号（1984年3月）

使徒信条と聖書

我は天地の造り主、全能の父なる神を信ず。我はその独り子、我らの主、イエス・キリストを信ず。主は聖霊によりてやどり、処女(おとめ)マリヤより生れ、ポンテオ・ピラトのもとに苦しみを受け、十字架につけられ、死にて葬られ、陰府(よみ)に降(くだ)り、三日目に死人の中(うち)よりよみがえり、天に昇り、全能の父なる神の右に座したまえり。かしこより来りて生ける者と死ねる者とを審きたまわん。我は聖霊を信ず。聖なる公同の教会、聖徒の交わり、罪の赦(ゆる)し、身体(からだ)のよみがえり、永遠(とこしえ)の生命(いのち)を信ず。アーメン。

この「使徒信条」は、カトリックまたプロテスタントを問わず、教会においては、キリスト教の基本、信仰告白の大本として聖書に次ぎ、時には聖書以上に重んじられると聞く。

しかし、教会に属したことがなく、聖書だけを頼りに唯ひとりで、あるいは平信徒の集まりにおいて信仰を保っておる者にとっては、この信条が目に触れることはまれであろう。水無誌でとり上げるのも始めてである。

それはともかく、この「使徒信条」の内容は、聖書の真理を濃縮したものというべく、一言一句、私達もこれを受け入れ、信じて疑わない。さらに、これをただ暗誦することで満足せず各自の信仰体験に照らし、聖書との関連において学ぶならば、一層深い啓示を与えられるであろう。(桜井)

第113号（1984年7月）

水戸日曜集会三十年の歩み
－低い姿勢で－

『水戸無教会』が発刊される前年六月矢内原忠雄先生の来水に際して開かれた「嘉信読者会」を契機として、少数の有志たちによって、松本さんの水戸幼稚園を会場に、日曜聖書集会が発足した。半田梅雄兄の「永遠の幼稚園生」(30号)は、百号の小貫兄の文章と共に、この間の消息を適確に伝えている。

今我々が日曜毎に集会をもつことを許されている場は、明るく近代的な園舎の一室であるが、発足の頃は、バラックに近い粗末な板張りの部屋で、園児用の低い机と、足をもて余すような可愛いい木の椅子を用いて、幼児のように低い姿勢になって、互に聖書の勉強にとり組んでいたことを、鮮かに想い起す。

六年間のそのような日曜毎の学びを、「永遠の幼稚園生」として神の選びの御手の下にあることを感謝されながら、「三十に而て立つ」というより、「むしろいよいよ幼児の如く主に従う」ことこそ我々の願いなのだと半田兄は強調された。

満三十年が経った今も、私どもは、その時と同じ感謝、同じ祈りをもって、恩恵によって支えられてきた「小さき群」の集いを、許される限り続けさせていただきたいと願っている。

この長い間、集いの場を提供され、私共を心より迎えて下さった松本老兄御一家の、更には、かつてこの場で集いを共にする恵みをゆるされた各地の兄姉たち、私共のつたない歩みを覚えてしばしば暖い導きと励ましを与えて下さった諸先生の、主にある御愛への感謝はつきない。(石原)

第114号（1984年11月）

「終始一貫」－石原兵永先生の御生涯に想う

○私どものひとしく敬愛する信仰の師、石原兵永先生は福音誌「聖書の言」を去る七月、五七七号をもって廃刊され八月十七日、安らかに天父の御許に召された。

先生が重篤の御病床で記された「聖書の言」の「廃刊の辞」を拝読し、「いろいろな困難もありましたが、終始一貫して、キリスト・イエスの福音のために働くことが出来ましたことを神の恩恵として、深く感謝いたします。」という一節に及ぶとき、私はその中の「終始一貫」という語句のもつ非常な重みを、先生八十九年の御生涯に照し痛切に感ぜしめられる。

○「右を見じ左をむかじひたぶるに　渡り進まむヨルダンの浪」

若き日の先生の歌と伺っているが、主に在る回心新生の尊い御体験を与えられた先生は、この歌の如く、戦前、戦中、戦後、時を得るも得ざるもただ「ひたぶるに」、「終始一貫」抑えがたき歓喜と希望をもってイエス・キリストの十字架による罪の赦しの福音を宣べ伝えたのである。しかも「終始一貫」、愛と真実と謙虚な御人柄をもって、多くの人々にこの純福音を伝道されたのである。

○「『回心記』をお読みの由…恩恵あふるる神の御手に捕えられていつ迄も信仰の途に歩みつづけられますよう祈ります。」

三十年前先生から頂いた御葉書を読み返えすとき、そしてひたすら主イエス・キリストの福音の中に歩み続けられた先生の尊い御生涯を想うとき、私もまた先生の如くに「終始一貫」信仰の日々を進みたく、主の御憐みと御導きを切に希求する。そしてこの私の祈りは水戸無教会、すべての人の祈りでもあろうと思う。なぜならこのことは直接御教導を頂いた私たち集会の先生に対する報恩の途であると共に、先生の御生涯こそ、聖書の教えるキリスト者の生涯だからである。(ピリピ三・13－14、ガラテヤ五・6)　(大森)

第115号（1985年3月）

夏期合宿聖書集会に思う

　水戸無教会グループ三十年の歩みの中で、二十二回に及んだ夏の合宿聖書集会が果した役割の大きさを思い、新たな感謝に満される。昭和38年8月に久慈郡横川鉱泉で第一回の集いを持っていらい、聖書講解は兄弟の分担、或は共同研究の方式で進めることができた。遠近からの参加者も、この世的な重荷から解き放たれて、一泊二日の間、起居を共にし、祈りと愛の交わりを深めることができた。私達は許されるならば、今後も年ごとに夏の集会を持ち、平素の集会では得られない格別の恩恵に浴し度く願う。それにしても、合宿集会のあり方は、集中的な聖書の勉強によって、福音信仰の基礎をゆるがないものとすべきことは申すまでもない。ただ、折角の合宿による集いをそれだけに終らせず、参加者全員が、できる限り発表の場、信仰告白の場を持てる様な配慮も必要であろう。
　その意味で、内村先生が、かって鳴浜夏期懇談会で語られたという談話は、私達の集会への示唆ともなるであろう。
　“夏期懇談会は其の名の如く…(中略)吾等の友情をあたため交際を強くするにあって、主なる目的は愛の交換に在りて智識にあらず”…“此会から最も多く得る者は最も多く与へる者である。馬太伝二十五章十四節以下にある譬喩の如く、預けられたものを地中にかくして置てはならぬ。持って居る物を人に与へる勇気を養はねばならぬ。…自分の物を多少与へずして他人から得やうとするのは、神の許したまはざる所天然の法則にそむく事である。”(’84・12岩波書店刊『内村鑑三談話』155ページ以下)(桜井)

第116号（1985年5月）

「第三水曜会」の先生たち

　一九三六年五月、二・二六事件の直後を最初として、鈴木俊郎、石原兵永、政池仁の三先生を中心とする「第三水曜講演会」が丸ビルで開かれた時、聴講した私の記憶は、まことに漠たるものである。しかし、四〇年三月に駿ヶ台で行われた「望星講座」では、三谷、松前両講師と共に、石原、政池両先生が熱誠をこめて語られた「聖書は世界を如何に見るか」と、イスラエルの預言者の時代から現在に及ぶ世界の動きへの洞察としての「歴史の示す明日の世界」とを、感銘をもって伺った。二つの講演会とも、祖国が次第に暗黒の勢力に支配されつつある状況を踏まえて、福音こそ、個人にとっても、民族や世界にとっても、真の平和の原動力であることが強く告げられた場であった。
　更に五年、アジアの国々と民族とに甚だしい悲惨をもたらし、祖国もまた重大な混乱と犠牲によって破局を迎え、敗戦を通して平和は来た。しかし、戦後四十年、一兆

弗(ドル)の軍事費の重圧が示すように、世界にも、日本にも、真の平和ありとは言えない。
半世紀に亘って、時をうるも得ざるも、只管、十字架の福音のみがまことの平和をもたらすことを叫び続けてこられた鈴木、石原の両先生をさきに天に送り、今また政池先生の凱旋の日を迎えた。そのことに私共は一つの時代の経過を見ると共に、R・ブラウニングのうたったように、「地にてはきれぎれの弧、天にては全き円」ということばに適わしく、三人の先生たちの地上における戦いは漸く終り、今や共に天に在って、全き方によって全きものとされておられるのだという思いは切である。(石原)

第117号（1985年7月）

水戸日曜集会満三十年を覚えて
－三十年の恩恵のあと－
石原　秀志

・　「エホバこれまでわれらを助けたまえり」－エベネゼル
＜Iサムエル七12＞
・　「しかし、神の恵みによって、わたしは今日あるを得ているのである」＜Iコリント一五10＞
・　「ただ、私たちは、達し得たところに従って進むべきである」＜ピリピ三16＞

本年六月が、今は改築されて僅かに一部にその面影を残している水戸幼稚園の粗末な建物と、園児用の粗末な机と椅子とを使用させて頂いて、最初の＜水戸無教会グループ＞の聖書集会がスタートしてから、満三十年にあたります。
その時の中心メンバーの御一人、半田梅雄兄は天にあり、園舎を提供されたのみならず、さまざまな面でお世話いただいた松本老兄御夫妻は共に御高令になられただけでなく、園長である松本つや夫人は長らく病床におられます。
三十年前の六月の矢内原先生の御来水と、その時思い切って先生にお願いして嘉信読者会を企画、実現された松本、半田、小貫等の諸兄によって、その直後の日曜日集会から、幼稚園での聖書の勉強を中心とするまことにささやかなエクレシヤが水戸の地に生れたのでありました。正しく小さな端緒であります。文字通り「二、三人我が名によりて集るところには我もまたあるなり」(マタイ一八20)というみことばの実現でありました。
前年の一九五三年(昭和二十八年)十二月来水された鈴木俊郎先生のクリスマス講演で知り合った小貫兄から伺って、九月から私も参加させていただくことになった時に、桜井、大森等の諸兄にもお目にかかり、半田兄の使徒行伝と大森兄のヨブ記連続講解を通して、週毎に共に学び、祈るよろこびを与えられてまいりました。
翌年一月の「水戸無教会」誌の発刊、七月の常陸太田の西山研修所での黒崎幸吉先生を迎えての聖書講習会をはじめとして、聖日毎の聖書集会の外に、’63年の夏以降、県北の山間地にある横川鉱泉で始められた宿泊聖書勉強の会は、’75年には笠間の吾

国山中腹の洗心館に移され、本年で二十二回を重ねることができました。水無誌についてはほぼ御承知と存じます。

桜井兄が苦心してお作り下さった年表を見ましても、この三十年の間、矢内原、黒崎、塚本、斉藤茂、石原兵永、鈴木俊郎、鈴木弼美、政池仁、藤沢武義の諸先生をはじめ、多くの先生方が、直接御出下さると否とを問わず、この水戸の地に芽生え、育ちつつある小さなエクレシヤを覚え、励まし、祈って下さったことを、深い感謝をもって憶えるものであります。

・＜ただキリストと共に歩む＞、これは半田兄によって掲げられた「水無」誌の姿勢でありますが、それは言うまでもなく、あの水戸幼稚園のバラックの園舎で生れた日曜聖書集会の精神であり、その集いに連なるメンバーの歩み方を示したものであります。

一週は一週、一年は一年、夏にはその年の一泊の勉強の集いをもち、十二月にはクリスマスの集いをおつ、その間何人かの先生方を迎えて講演会や聖書講義の時を恵まれ、さらにはメンバーの親しい先輩、友人の方々にも参加いただき感話をお願いする、そのような活動、集り方に終始いたしました。ただそれだけであります。宮沢賢治に従って言えば、「ほめられもせず、苦にもされず」といったところでありましょう。

・＜水無叢書＞I、II、IIIの著者でもある仙台の吉原賢二兄は、二十数年前、アメリカ留学中に、「地方無教会運動について」という一文を寄せられました。(水無誌№33、34)

それには、二つの類型がある－指導者を中心とした家塾的形態と、特定な指導者によらない兄弟団的性格のものと－とされた上で、水戸のグループが後者の傾向をもっていることは、それなりに評価されてよいのではないかと述べると共に、内村鑑三以後の三十年の歴史を考えるとき(吉原兄の文章は一九六一年のものです)、次の三十年は、庶民の中に根を下すものでなければならないと指摘されています。二十数年を経た現在、もう一度我々水戸の集会も、このことを真剣に考えてよいかと思います。

・「生みの苦しみ」の時からの兄弟団の中心的働きをされた半田兄、そして二十数年に亘って、東京におられながら、私共の大切なメンバーとして許される限り参加し、この小さな群のために、キリストにある愛と真実とを傾けて下さった宇野兄のお二人を思うこと切であります。しかし、パウロの言うように、私共が今日あることができるのは、正しく神様のはかり知れない恩恵によるのであり、今、ここにまで至ることのできましたことを心より感謝しつつ、謙遜と真実とをもって、コイノニアに適わしい歩みを、許される限り続けてまいりたいと願うものであります。('84・12・23)

第118号（1985年10月）

願くはなんぢの義をもて我をいかしたまえ(詩一一九・40)

神によって造られた人間は、本来、神の義とされるところに従って生きるべき存在であった。それが禁断の木の実を食べ己の義、己の力に眼を開かれた結果、神にそむ

く者となってしまった。その罰が、神から負わされた苦難と死という軛(くびき)である。だから人は真に自己の不義に気づくとき、この詩人の様に、神の義によって生かされることを求めずにはおられない。

創造主なる神は人を立ちかえらせるべく、律法を示してそれを守ることを求められたが、人にはそれを果す力がなかった。神は最後に、独り子イエスを世につかわし、その十字架上の血によって人の不義を帳消しにするという非常手段をとられた。これが信ずる者に賜わる神からの一方的恩恵としての福音である。これを受け入れる者は、そむきの罪そのままで、イエスの十字架のゆえに、永遠の命が与えられるのである。

しかし、その様な福音に預かり乍らも、人の地上の生活には、なおサタンの誘惑が伴い、ともすれば自分の義、自分の力によって生きることが至上の幸福である様な誤った考えに陥り易い。神の義を求めること(マタイ六・33)を忘れてしまう。

この意味で、神の義によって生かされたいとの旧約の詩人の願いは、そのまま私達の祈りでもなければならない。(桜井)

第119号（1985年12月）

八月十五日の祈り－戦後四十年の日の朝に－

われらの尚　ほろびざるは　エホバの仁愛により
その憐憫の尽きざるによる　(哀歌三・22文語訳)

あの潰滅した都市と工場群と、ヤミ市と、残されたやせ衰えた農地・開拓地と、記録的な台風と冷害と空前の凶作との中から、国民は立上りました、生きるために。働きました、子供たちを支えるために。放棄しました、一切の軍備を、完全な平和国家となるために。

朝鮮戦争が起り、占領が終り、経済の回復と拡大上昇が続き、幾度かの危機を乗り越え、40年にして世界第一級の経済大国となりました。一度放棄した軍備も、国を守るという名分で強化を続け、世界第七位と言われる軍事強国となってしまいました。

ああしかし、学校栄えて教育衰え、ほとんどの国民が中流生活を楽しんでいるかの中で老人や幼児の多くが見棄てられ、世界の三分の一が飢えている中で飽食暖衣に疑いを抱かず、山や森林や過疎の村々が荒廃し放棄される中で、スポーツやレジャー、快楽が人生の最大関心事とされるような世相、国栄えて世は乱れ、あらゆる場でモラルの亡びに瀕しているこの愛する祖国。この国は果して21世紀に生き残れるかを問う人々が、国の内外に決して少くありません。

40年前に一度日本は亡びました。鑑三が憂え、藤井武が預言した如くに。今、日本が再び亡びへの途を辿りつつあることを恐れます。どうか神様、八月15日のこの日、国民の中に真の悔改めが起り、新しい一歩を踏み出す人々を与えて下さい(石原)。

第120号（1986年2月）
なし

第121号（1986年4月）

エホバよ汝はわれに近くいませり
なんぢのすべての誡命(いましめ)はまことなり
(詩篇第一一九篇151節)

生れ乍らの人間は、この世的にどんなに恵まれても、そのままでは神に遠い存在であって、まことの平安を与えられることはない。しかし、その生れ乍らの人間も、キリストの十字架の信仰を受け入れるならば、例によって歩む者として造りかえられ、この世的にはどんなに逆境に立たされようとも、神に近い存在としてまことの平安を与えられる。そして、この詩人のように、己に近き神を讃え、「神のすべてのいましめ、すなわち、神の御心こそ真実なり」との叫びを挙げずにはおられない。
創り主なる唯一の神と、その独り子イエスの愛によって生きることが、私達の本来あるべき姿だからである。
神に祈り求めるとは、だから、いつも神に近くあることを願うことであり、しかもそれは自分一人がそうであることを願うだけでなく、この世のすべての人が、神に近づくものとされることを願うことである。そこに神の国実現という造物主の遠大にして永遠なる計画がある。
そうは言っても、サタンの誘惑の多い地上の歩みの中では、人はともすれば生れ乍らの人間の欲望をすて切れず迷ってしまう。それゆえ、「もし私が迷える羊のように迷う時は、あなたの僕を探し出して下さい」(詩篇第一一九篇176節－関根訳)との詩人の祈りは、また私たちの祈りでもある。(桜井)

第122号（1986年7月）

見る、見ない。見える、見えない。

「あなた方は聞きに聞いても決して悟るまい
見に見ても決してわかるまい」マタイ一三・14前田訳

科学の進歩は、広大な宇宙をも、極微の世界をも、どんなに我々に近づけ、鮮明にしてくれたことか。だが、本来的な人間の視力や聴力はむしろ退化していると言えるのではないか。
視野狭さく症という眼の病いがあるが、現代人の多くは、より本質的な意味で、こ

の病いに罹っている。彼らは、自分とその仲間しか見ない。周囲に様々な困難をもった人々がいるのが見えない。空腹の人、一杯の水が欲しい人、今日の宿がない人、着るものをもたない人、無法にも自由を奪われている人、あるいは、助けを求めて何等かのサインを送っている子供や老人や病人たちが見えないし、その叫びが聞えない(マタイ二五)。学校や職場や夫々の生活の場で、如何にしばしばそのようなサインや訴えが見えなくなっているか。彼らは、自分とそのグループのことしか見ない。それ以外の人たちが見えない。

ユダヤ人、ことに誇り高い祭司階級にとって、あのエリコ街道で傷つき倒れている人間は視野の中に入らず、日頃軽蔑しているサマリヤ人の旅行者のみがこの半死半生の被害者を見、助けを要する危機の状況が見えたのであった。冒頭のイザヤのことばのあとで、「あなた方の目は見、耳は聞くから幸いだ」とイエスは告げられたが、それは同時に、「＜見える＞と言いはるところに、あなた方の罪はある」と言われて悟らないパリサイ人に対する痛烈な一撃でもあった(ヨハネ九)。(石原)

第123号（1986年10月）

“目を覚ましておれ”

イエスが弟子達に語られた世の終りの譬話の中で、この“目を覚ましておれ”との言葉は三回も繰り返されている。(マルコ一三・32〜37)

私達の望みは世の終りの時に、イエス・キリストが再び来りたもうて正しい裁きをなされ、この地上に神の国が実現されることであるが、その時がいつであるかは、父なる神様のほか誰もこれを知らない。だから、この譬話では、旅に出た家の主人がいつ帰っても出迎えできる様、僕べたちが準備しているのと同じく、主の来臨は、目を覚まして待てと諭される。イエスの来臨をお迎えできなかったら、私達は神の国に入れず、永遠の滅びに陥るのである。

ここで、目を覚まして居るとは、魂を眠らせないこと、霊のアンテナを絶えず張りめぐらしていることである。いいかえれば、この世のことに心を奪われ、或は互いに争ったり、不道徳に走ったりせず、またサタンの誘惑に陥らぬことである。そのため我々に出来ることは、聖書の精神に立ち帰り、祈りによって聖霊をいただき、いつも神様の方に心を向けていることである。この意味で、パウロが、そのいましめで、この“目を覚ましておれ”を、次の様に第一番に挙げているのは注目すべきであろう。

「目を覚まして居れ、しっかり信仰に立て、男らしかれ、強かれ、しかし強いと同時に、君達のする凡てのことを愛をもって行え」(第一コリント一六・13〜14塚本虎二訳)(桜井)

第124号（1986年11月）

二十五周年と五十五周年
－矢内原先生と藤沢先生－

この一二月二五日は、私共の集会発足の土台となられた矢内原忠雄先生を二十五年前に天にお送りした日である。二十五周年を前にして、今もなお、小さな群としての歩みを続けることを許されている私共の、先生に対する感謝は尽きない。

本年六月に召された藤沢武義先生の『求道』終刊号が十月に刊行され、先生のこの小さな伝道誌が一九三〇年夏以来、昨年までの五十五年間に亘り、山陰米子の地から福音の叫びを続けてこられたことを教えられたことに、大きな驚きと感謝とをあらためて覚えずにはいられない。

一九三七年夏、藤沢先生の主催による大山の矢内原忠雄聖書講習会は、矢内原先生に対する圧力の強まりの一因となったと共に、それまで十一回に亘って発禁処分を受けてきた『求道』を遂に廃刊に追い込み、藤沢先生自身、三ヶ月に及ぶ拘禁というきびしい弾圧を受けられる結果となった。そのような迫害と苦難の中にも福音への熱情は強められ、戦中、戦後の超人的とも言える活動は全国、韓国、ネパール、米大陸にまで及び、水戸、茨城の地にも六〇年から八三年まで二十回に近い訪問、講演の労を続けられ、私共の小さな群を常に力強く励まして下さったことを、銘記せねばならない(122号参照)。最後の病床もまた、福音の証人として過されたことを伺い、死の直前の夏の講習会に全力を投入されて、あの壮絶な病床から召された矢内原先生に思いを馳せながら、藤沢先生八十二年の御生涯もまた、キリストに生き、キリストに死ぬ福音の戦士の生と死であったことを強く思わしめられるのである。

「われら生くるも主のために生き、死ぬるも主のために死ぬ。然れば生くるも死ぬるも我らは主の有なり。」(ロマ一四・8)

(石原)

第125号（1987年2月）

わたしにつまずかぬ者は幸いである
－マタイ福音書一一・6－

旧約の預言に従ってこの世にメシヤとして来られたイエスに対し、ユダヤの大祭司連と律法学者達はイエスが神を冒瀆する者だとして、彼を十字架上に葬るという大きな躓きの罪を犯した。イエスの生れ故郷のナザレ人達も大工の子イエスに躓き、また洗礼者ヨハネも牢屋の中で、イエスの活動振りを伝え聞いて躓いた。さらにイエスの第一弟子ペテロでさえも、イエスが捕えられ裁かれるのを見て、メシヤたる者のあるべき姿と思えず、三度までもイエスを否むという躓き様であった。

このようにイエスに躓いた者たちは、イエスにあまり近くあったか、人間イエスの

みを見た為に、メシヤとしてのイエスを受け入れることが出来なかったということであろう。もっとも、ペテロはイエスの復活後、霊の眼を開かれ、復活の証人となって活躍したのであるが。

之に対し、イエスを肉において知ることなく、然もキリスト教徒迫害の急先鋒であったパウロが、復活のイエスに出会って一八〇度の回心をさせられ、異邦人使徒として偉大な活躍をした事実とを合せ考えるとき、イエスに躓かぬ幸いを与えられるのは、肉においてイエスを知ることでなく、復活のイエスとの出会いこそが、その唯一の道であるといえるのではないだろうか。今の私達は聖書の学びを通して復活のイエスに出会うことの出来る恩恵を感謝し度く思う。(桜井)